

子曰く、其の鬼に非ずして之を祭るは、諂うなり。

義を見て為ざるは勇無きなり。

【大体の意味内容】先生はおっしゃった。「鬼神を敬って、その年の収穫物などをお供えして感謝の祭りを行うのはよいことだが、そうではなく、ひたすら思い上がった金持ちや権力者に贈り物をして祭り上げる者がいる。彼らは自分で努力はせず、力あるものに単に媚び諂って、おごぼれの利益ばかり得ようとする者たちだ。生きる力の弱い連中である。

「義」とは、現実の利益は期待できないが自分にとって素晴らしい、ありがたいと感じるもので、「カミ対応」とか「カミってる」などと呼ぶべきようなものである。そうした「カミ」を感じて心から感謝したり、それに倣った行いをしようとしなのは、その人に本当の、心身の奥深くから湧き出てくる湧泉（＝湧き水）のような生きる力、すなわち『勇（湧・涌）』がないのである。」

『勇』とはほんらいは、怖さに打ち勝って相手を叩きのめそうとするような暴力的なものではなかったのです。むしろ、「ゆるぎないやむじま」のことだと言いつつ換えてもよいでしょう。「義」という文字が、本来は神の前で舞を舞う意味であることも、今回調べてみて知りました。むかし、島根県的美保関という、都会の喧騒とは無縁な漁港の町に鎮座する美保神社にお参りしたことがあります。毎日夕方になるとその神社の巫女さんたちが、ご神前の舞台で、たくさん鈴がついた神具をしゃらんしゃらん鳴らしながら静かに美しく舞を舞っていたのを思い出しました。それは多くのお客さんたちに見てもらうためではなく、ギャラをもらうためでもなく、次第に夕闇に染まってあたりが暗くなる中でひたすら神様のためにだけ舞う、その姿の神々しい美しさはまさに衝撃的でした。二十年三十年たった今もありありと目に浮かびます。これまでの人生の中ではほんの一瞬の出来事に過ぎません。が、それが一生の記憶になり、ずっと、自分の姿勢を正すモデルになることもあるのです。自分も、誰かにとってそんな存在でありうるだろうか。ほど遠いこととはいえ、いつもそんなことを思っています。